

2019/07/14

しなやかな闘い ポーランド女性作家と映像

1970年代から現在へ

Her Own Way—Female Artists and the Moving Image in Art in Poland: From 1970s to the Present

2019年8月14日（水）— 10月14日（月・祝）



東京都写真美術館では、日本・ポーランド国交樹立100周年を記念して、東欧の文化大国ポーランドの1970年代以降の美術を、女性作家と映像表現のあり方に注目して紹介する展覧会を開催します。

20世紀のポーランド美術史・映画映像史は、数多くの男性の名によって語られてきました。しかし、ベルリンの壁崩壊後いっきに東側に流れ込んできたグローバル経済の波に参画し、EU加盟も果たした21世紀のポーランドにおいて、女性たちによる多くの表現が、特に映像表現の領域で存在感を放っています。と同時に、これまで十分に語られてこなかった、女性作家の映像を用いた表現の先駆例について再検証しようという流れが生まれています。

本展は、ポーランド国内外の研究者やキュレーター、関連機関との連携交流を通じて、ポーランドの1970年代からの美術の歩みを、その時代背景をふまえながら新たな視点で読み解きます。そして、世代を異にする女性アーティストたちが、自身のおかれた社会環境を見つめ、それぞれの表現方法で発信する術を、いかに見出してきたかをたどる、きわめて意欲的な展覧会です。

カロリナ・ブレグワ《嗚呼、教授！》2018年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー（6分）Courtesy of the artist

■ 魅惑の文化大国、ポーランド！

ポーランド共和国は、バルト海に面し、ロシアやウクライナ、チェコ、ドイツなどに囲まれたヨーロッパの中央にある国です。東欧と西欧の文化が混じりあい、美しい街並みや世界遺産、平原や湖などの自然にも恵まれています。



ポーランドの文化には、かつては欧州の大国として栄えながら、隣国による分割支配が繰り返されるという歴史を背景に、時にしたたかに生き延びてきた強さと深みがはらまれています。

また、ポーランドは日本とは地理的・文化的に遠く離れた国のように思いますが、実は、たいへんな親日国として知られています。

ポーランドの首都ワルシャワ

ポーランドと日本

第二次世界大戦後に、ポーランドと日本は、1957年「日本国とポーランド人民共和国との間の国交回復に関する協定」(日波復交協定)により、両国の戦争状態を終結させ、政治・経済・文化における公式の関係を復活させました。その後、両国間では演劇、グラフィックアート、音楽、映画などを通じて、文化交流が盛んに行われています。1994年に日本美術技術博物館(通称：マンガ館)が、クラクフ市に設立されるなど、ポーランドは中東欧地域を代表する日本文化発信拠点となっています。

国名：ポーランド共和国

面積：32.2万平方キロメートル(日本の約5分の4程度)

人口：約3,840万人(2019年2月：ポーランド中央統計局)

首都：ワルシャワ(約176.4万人)

言語：ポーランド語

宗教：カトリック(人口の約88%)

通貨：ズロチ(Zł) 1Zł=約29円(2019年3月平均)

日本との時差：冬期(11月から3月)で8時間、夏期には7時間

世界遺産：クラクフ歴史地区、アウシュヴィッツ・ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所ほか、計14箇所(2019年3月時点)

著名人：フレデリック・ショパン(作曲家)、ニコラウス・コペルニクス(天文学者)、キュリー夫人(物理学者・化学者)、

ヨハネ・パウロ2世(ローマ法皇)、アンジェイ・ワイダ(映画監督)、ロマン・ポランスキ(映画監督)

日本人訪問者数：63,690人(2018年ポーランド中央統計局)

日本語学習人口：国立4大学に在籍する約600名の日本専攻学生に加え、約60の学校・機関で合計約4,500名が日本語を学習している。

主な文化交流イベント：ショパン国際ピアノコンクール(1927年～)、日本語弁論大会(1958年一)、総合日本文化交流事業 日本祭り(2013年～)、ポーランド映画祭(2011年～)など



■ 本展のみどころ

1. ポーランド女性作家が選んだ「アート」という闘いかた

世界的に広まった #MeToo や日本の #KuToo など、女性に関する問題は、いまでも日常的に身近なところで起こっています。ポーランドでは伝統的な慣習が大切にされ、女性には「良き母」、「良き妻」、「良き娘」そして、「良き働き手」であることが理想として求められてきました。また、東欧と西欧の格差による差別や、多様な性への偏見といった根深い問題もあり、これらは時に、女性たちの自己実現を難しくしてきました。

このような目に見えないさまざまな問題と向き合うために、ポーランドの女性作家たちは、社会のなかで自分らしく生きるための術として、「アート」を必要としました。彼女たちが挑む、しなやかな闘いかたは、性別を越えて、私たちに、社会のなかで自分らしく生き抜くためのアイデアと希望を与えて与えてくれるはずです。

2. 実験的な映像表現に注目

1970年代、世界ではビデオ・カメラを使った映像が、絵画や彫刻、映画とも異なる新しい分野の芸術として頭角を表しました。

本展では1970年代から約50年にわたる、ポーランド女性作家の映像表現の変遷を一望することができます。共産主義政権の下、まだビデオ・カメラを使う機会が限られていた1970年代には、フィルムを使って実験が試みられました。民主化を果たし、1990年代に入ると、ビデオ・カメラや新しい映像技術を使った表現がつぎつぎと生まれます。その手法は、自分自身がカメラの前に立ってアクションする「セルフイー」、日常を非日常に置き換える「発想の転換」、社会や人間の暗部までを鋭く暴き出す「批判精神」、既存のシステムやメディアを利用して表現をする「ハッキング」など作家の世代によっても様々です。冷戦下の共産圏を生きたパイオニア世代から、グローバル化した現代のデジタル世代に共通する実験精神は、誰もが気軽に動画を撮影・発信できる時代のいまだからこそ、新鮮な驚きをもたらしてくれるでしょう。

3. 日本初公開作品を多数紹介

近年ポーランドでは、多くの研究者の尽力により、これまで十分な調査研究がなされてこなかった女性映像作家たちの功績を再評価する動きが高まっています。本展は、東京都写真美術館が、出品アーティストのみならず、現地ポーランドで活躍する気鋭の研究者、キュレーターをはじめとする多くの人々との交流の成果として、実現するものです。これまでとは異なる新たな切り口で、ポーランドの同時代美術と映像表現の変遷をご紹介します。作品のほぼすべてが日本初公開となる、大変貴重な展覧会です。

■ 展覧会構成／出品作家一覧（24組 25名）

I. 限られたアクセスのなかでーパイオニア世代の映像実験 1970-80年代

エヴァ・パルトゥム／Ewa Partum [1945 -]	イザベラ・グストフスカ／Izabella Gustowska [1948 -]
ナタリア・LL／Natalia LL [1937 -]	アンナ・クテラ／Anna Kutera [1952 -]
ヨランタ・マルコラ／Jolanta Marcolla [1950 -]	テレサ・ティシキェヴィチ／Teresa Tyszkiewicz [1953 -]
ヤドヴィガ・ジンゲル／Jadwiga Singer [1952 - 2008]	イヴォナ・レムケ=コナルト／Iwona Lemke-Konart [1958 -]
バルバラ・コズウォフスカ／Barbara Kozłowska [1940 - 2008]	

II-1. 転換期ークリティカル・アート潮流とともに 1990年代以降

ユリタ・ヴィチック／Julita Wójcik [1971 -]	カタジナ・コズィラ／Katarzyna Kozyra [1963 -]
ズザンナ・ヤニン／Zuzanna Janin [1961 -]	ヨアンナ・ライコフスカ／Joanna Rajkowska [1968 -]

II-2. 過去と未来への視点 2010年代以降

ホノラタ・マルティン／Honorata Martin [1984 -]	カロリナ・ブレグワ／Karolina Breguła [1979 -]
ボグナ・ブルスカ／Bogna Burska [1974 -]	アグニエシュカ・ポルスカ／Agnieszka Polska [1985 -]
アンナ・モルスカ／Anna Molska [1983 -]	アグニエシュカ・カリノフスカ／Agnieszka Kalinowska [1971 -]
カロル・ラヂシェフスキ／Karol Radziszewski [1980 -]	アリツィア・ロガルスカ／Alicja Rogalska [1979 -]

II-3. 新世代の感性と社会とのかかわり

アンナ・ヨヒメク&ディアナ・レロネク／Anna Jochymek & Diana Lelonek [1988 -]
ヤナ・ショスタク／Jana Shostak [1993 -]
ヴェロニカ・ヴィソツカ／Weronika Wysocka [1994 -]

■ 出品点数 計28点（予定）

■ 主な出品作品

1. 限られたアクセスのなかでーパイオニア世代の映像実験 1970-80 年代

東西冷戦下、鉄のカーテンの向こう側で、女性アーティストたちは、機材や技術へのアクセスがきわめた限られた環境下でありながらも、さまざまに映像表現を試みていました。若手気鋭のアーキビストで研究者のマリカ・クジミチ氏（アルトン財団代表）を共同キュレーターとして招き、ポーランド国内でもまだ貴重な近年のリサーチの成果をご紹介します。



エヴァ・パルトウム Ewa Partum [1945 -]

《ドローイング TV》 1976年 8ミリフィルム（ビデオに変換）、白黒、サイレント（6分1秒）

Courtesy of the artist



ヨランタ・マルコラ Jolanta Marcolla [1950 -]

《キス》 1975年 16ミリフィルム（ビデオに変換）、白黒、サイレント（1分51秒）

Courtesy of the artist

ナタリア・LL（ラフ＝ラホヴィチ） / Natalia LL (Lach-Lachowicz) [1937 -]



1975年に国際的なフェミニスト運動に加わり、多くのシンポジウムや展覧会に参加した、ナタリア・LL。彼女の作品はしばしばスキャンダラスなものと思われ、展覧会は検閲の対象となりました。フェミニストに関するセミナーも手がけ、1978年にはポーランドの作家による初のフェミニスト作家の展覧会「女性たちの芸術 (Women's Art)」を企画・開催しました。

《消費者アート》 1972年 写真パネル

© Natalia LL / Courtesy of lokal_30Gallery, Warsaw (※)



ヤドヴィガ・ジンゲル／Jadwiga Singer [1952 - 2008]

《ジ・エンド、ジ・エンド》 1979年 16ミリフィルム（ビデオに変換）、白黒、サイレント
(5分) Courtesy of Arton Foundation and Artist's Family



バルバラ・コズウォフスカ／Barbara Kozłowska [1940 - 2008]

《視点》 1978年 写真パネル

Courtesy of Zbigniew Makarewicz



イザベラ・グストフスカ／Izabella Gustowska [1948 -]

《相対的類似性》 1980年 16ミリフィルム（ビデオに変換）、白黒、サイレント (4分29秒)

Courtesy of Izabella Gustowska and Arton Foundation, Warsaw



アンナ・クテラ／Anna Kutera [1952 -]

《対話》 1974年 16ミリフィルム（ビデオに変換）、白黒、サイレント (5分19秒)

Courtesy of the artist



イヴォナ・レムケ=コナルト Iwona Lemke Konart [1958 -]

《人間の可能性の限界》 1984年 16ミリフィルム（ビデオに変換）、白黒、サイレント

(3分1秒) Courtesy of the artist

II-1. 転換期—クリティカル・アート潮流とともに 1990年代以降

民主化を果たしたポーランドの社会は、新たに再編されたヨーロッパの秩序のなかで、物質的な豊かさを得ていく一方で、格差の拡がりや価値観の変化などの転換を経験します。そんな時代を背景に、1990年代以降のポーランドで顕著となった、社会批評的な表現を意味する「クリティカル・アート」の潮流には、誰もが気づいていながら直視していない人間性の闇の部分にも果敢に迫り、作品によって露わにするという傾向がみられます。

ズザンナ・ヤニン／Zuzanna Janin [1961 -]

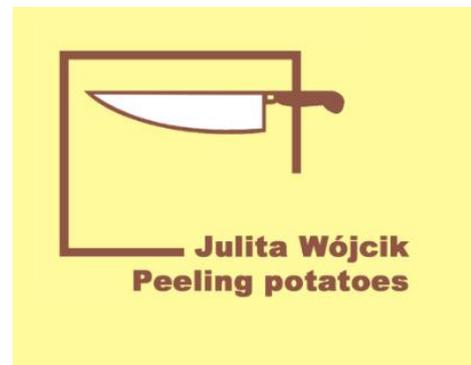


真っ白いリングの上で、細身の女性（ヤニン自身）が、明らかに体格、腕力、そして技量に勝るヘビー級のプロボクサーを相手に対戦しています。数ヶ月に及ぶ入念なトレーニングを経てこの闘いに臨んだというヤニンの動きは真剣そのもの。極端過ぎるほどに図式的な男女の対比ではありますが、その簡潔さゆえに、さまざまな思考を誘発し、また、見る者の身体にも直接的な作用を及ぼします。

《闘い》2001年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー、サウンド（9分）

Courtesy of Zuzanna Janin Studio and lokal_30, Warsaw

ユリタ・ヴィチク／Julita Wójcik [1971 -]



個人的な視点から社会の慣習や慣例を読み取り、作品で取り上げる表現を行ってきたユリタ・ヴィチク。公的に行ったパフォーマンスの記録でもあるこの映像でヴィチクは、ジャガイモの皮を剥くという単純

作業を、台所という私的な空間から美術館という公的な空間に置き換えて行っています。社会が転換しても、変わらずに繰り返される日常の行為を「アート」という文脈で提示したとき、アートが現実の世界と、いかにして同じ土壌の上で関わり合えるかをめぐり、より深い対話が生まれます。

《芋の皮剥き》2001年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー、サウンド (10分52秒)

ザヘンタ国立美術館 (ワルシャワ) 所蔵作品 Collection of Zachęta - National Gallery of Art, Warsaw

カタジナ・コズィラ Katarzyna Kozyra [1963 -]



実際に大量の火器、銃器を用いて、民兵的な訓練を展開している男性たちに取材した作品。昨今、サバイバル・ゲーム(擬似的な戦闘)が、日本でも普及していますが、彼らの繰り広げる「ゲーム」は、アクション映画さながらのスケールです。男性たちにグラビアモデルを象ったマスクを被らせることでコズィラは、単に暴力を批判するだけでなく、誰にでも潜在し得る理由なき破壊衝動を描きだします。

《罰と罪》2002年 7チャンネルビデオ、カラー、サウンド (9分) Courtesy of the artist

ヨアンナ・ライコフスカ/Joanna Rajkowska [1968 -]



認知症を患って晩年を施設で送り、そこで他界した自身の母親への想いから、ライコフスカ自身が私的に行ったパフォーマンスにもとづく映像作品。施設のパジャマを着て母に扮し、かつて母が徘徊した町をさまようライコフスカは、母が抱いていたのであろう恐れや不安を自ら追体験しています。パフォーマンスと知らずに巻き込まれる人々の他者への優しさも垣間見られるなど、個人的な想いが、虚実の境界を越えて描きだされます。

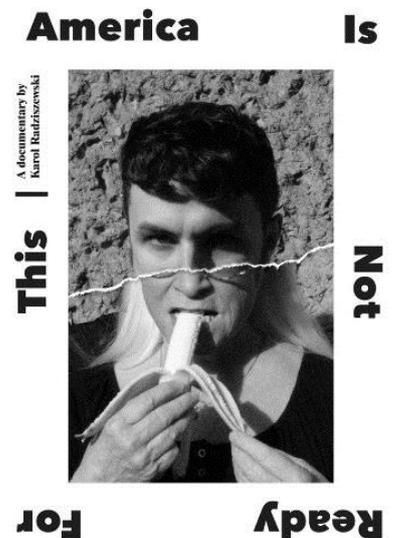
《バシャ》 2009年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー、サウンド (16分)

Courtesy of the artist and l'étrangère Gallery, London Photo: Marek Szczepański

II-2. 過去と未来への視点 2010年代以降

社会主義政権下に幼少期を送り、民主化後に高等教育を受けた世代のアーティストたちの多くには、一定の距離をもって過去を新たな視点で検証することから、現在を読み解き、未来への視点を探ろうという姿勢が見られます。複雑化する社会政治情勢を批評的に見つめながらも、映像表現としての豊かさにも創意を傾けた作品がさまざまに生み出されています。

カロール・ラヂシェフスキ / Karol Radziszewski [1980 -]



カロール・ラヂシェフスキは、アーカイブをベースに、多種多様な文化的、歴史的、宗教的、社会的なテーマ、およびジェンダーに関する主題を横断的に扱っています。本作では、ポーランド同時代美術および映像表現の先駆者であるナタリア LL が、1970年代にニューヨーク滞在中の記録をたどり、当時を知る現地の人々（今は亡きヴィト・アコンチやキャロリー・シュネーマン他）、そして作家本人にインタビューを試みています。

左：《カロールとナタリア LL》 2011年 写真パネル
右：《アメリカはまだ準備ができていない》より ポスター 2011年
ともに Courtesy of the artist and BWA Warszawa, Warsaw

カロリナ・ブレグワ／Karolina Breguła [1979 -]



時に媚びたり、怒ったり、拗ねてみたり…、画面に向かって「教授！」と、様々な声色で呼びかける女性は、ブレグワ本人。ブラウン管型のテレビや縦横比が4:3の画面、そしてカメラにむかって作家自身が語りかけるという形式は、自身の師で、ポーランドを代表する著名な実験映画作家ユゼフ・ロバコフスキ（1939年 - ）とその作品へのオマージュです。敬意を抱きつつもその影響から逃れられない葛藤とともに、アカデミーの教授職に象徴される社会の要職の圧倒的な多数が男性たちによって占められてきた現実について、見る者に問いかけてきます。

《嗚呼、教授！》 2018年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー（6分） Courtesy of the artist

アグニエシュカ・ポルスカ／Agnieszka Polska [1985 -]



アグニエシュカ・ポルスカは、アーカイブ写真やイラストなどの既存の素材を用い、巧みに加工を加えて映像作品を制作しています。本作のタイトルのセイレーンとは東欧に古くから伝わる伝説のなかの人魚のこと。人魚は、首都ワルシャワのシンボルでもあります。「魚であって魚でない、人であって人でない」という、アイデンティティの不確定さが、ポーランドのアイデンティティの移ろいに重ね合わされています。

《セイレーンに尋ねよ》 2017年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー（8分30秒）

Courtesy of the artist and ŻAK | BRANICKA, Berlin

アグニエシュカ・カリノフスカ / Agnieszka Kalinowska [1971 -]



アグニエシュカ・カリノフスカは、民主化にともない豊かになっていく社会で、不当に省みられず、声を持たない人々に光をあて、対話や協働のプロセスのなかから作品を生み出します。カリノフスカの映像作品はしばしば、社会的な経験の結果として提示され、アートが彼・彼女たちに何ができるのか？アートが人々をどう動かすのか？という問いになっています。2 日間にわたる集中ワークショップの記録でもあるこの作品では、様々な事情により矯正施設で暮らす青少年少女たちを美術館に招き、偏見のない視線で、彼・彼女たちのふるまいや本音を描き出しています。

《ネズミたち》 2012年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー、サウンド（19分7秒）
Courtesy of the artist and Gallery BWA Warszawa, Warsaw

II-3. 新世代の感性と社会とのかかわり

民主化以降に生まれた若手世代の作品に見られる傾向とその評価は、現在進行形で更新されていますが、なかでもフレッシュないくつかの作例を紹介します。美術館に象徴されるようなアート・システムのみに固執せず、アクセス可能なメディアを利用して自らの声を社会に届けようというポジティブな姿勢や、グローバルな経済システムの矛盾に対し、当事者の自覚をもってアクションを起こしていくといった、しなやかな批評性が特徴的です。

アンナ・ヨヒメク&ディアナ・レロネク / Anna Jochymek & Diana Lelonek [1988 -]



アンナ・ヨヒメクとディアナ・レロネクは、ポズナニにある公的ギャラリーの館長公募に、二人組の人格として応募しました。出品作品《ディレクトレシィ（女性館長）》は、そうしたパブリック・アクションの一部として実際に提出された、ビデオ映像による応募動機資料です。直截な言葉で次々と投げかけられる、「改革案」の形をとった挑発的な映像。その作り方は、ネット上の投稿動画を想起させます。

《ディレクトレシィ（女性館長）》 2017年 シングルチャンネル・ビデオ、カラー（7分29秒）

Courtesy of the artists

ヤナ・ショスタク / Jana Shostak [1993 -]



Photo: Nowak



隣国ベラルーシ出身であるショスタクは移民問題に関わる自分のステイトメント(声明)を、広める手段として、いわゆる「ミス・コンテスト」への参加そのものを、ある種のパフォーマンスとして行っています。外見のみでなく内面の美しさも審査の対象として競われる「ミス・コンテスト」は、アート界における生存競争にも準えられます。フェミニスト・アートの文脈では、矛盾をはらむプロジェクトではありますが、既存のシステムを軽やかにハッキング(利用)して、自身の声を社会に発信しています。

左) ヤナ・ショスタク近影 2017年

右) 《NOWAK / NOWACZKA / NOWACY》2017年

ともに Courtesy of the artist

■ キュレータープロフィール

マリカ・クジミチ Marika Kuźmicz [パート I : ゲスト・キュレーター]

1982年ワルシャワ生まれ、在住。ワルシャワ大学及びポーランド・アカデミー 科学インスティテュート（ワルシャワ）にて美術史を学ぶ。非営利団体アルトン財団（ワルシャワ）を主導し、70年代のポーランド美術に関する調査や展覧会の開催に注力。『映画形式ワークショップ』（2016年、ウカシュ・ロンドゥダと共同編集）や『ポーランドにおけるパフォーマンス史』（2019）など、1970年代の美術に関する出版物の執筆や編集も手がけ、現在も複数の作家に関するモノグラフを執筆中。映画祭「アルトン・レビュー」（2014年よりワルシャワ国立美術館と共催、2017年には、ロンドンのホワイト・チャペル画廊にて開催）のキュレーターを務めるほか、国際欧州プログラム（Creative Europe Program）の助成による国際的プロジェクト「忘れられた遺産 ヨーロッパ前衛美術オンライン（Forgotten Heritage - European Avant-Garde Art Online）」（www.forgottenheritage.eu）の創始者であり、主要コーディネーターでもある。ポーランドの最も重要な写真家である Edward Hartwig の功績を称える非営利団体 Edward Hartwig 財団理事長。現在、ワルシャワ美術アカデミー、ワルシャワ大学にて教鞭をとっている。

岡村恵子 Okamura Keiko

1969年生まれ、東京在住。早稲田大学大学院文学研究科芸術学（美術史）専攻修士課程修了。1995年より東京都現代美術館学芸員として、同館で「MOT アニュアル 2000 低温火傷」（2000年）、「転換期の作法 ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリーの現代美術」（2005-06年、国立国際美術館、広島市現代美術館、国際交流基金との共同企画）他を手がける。2007年より東京都写真美術館学芸員として映像部門を担当。「石田尚志とアブストラクト・アニメーションの源流」（2009-10）、「フィオナ・タン まなざしの詩学」（2013）他を企画するとともに、2009年に領域横断的な映像フェスティバル恵比寿映像祭を立ち上げ、毎年企画に携わってきた。（第1～5、9、11回はディレクターを務める。）美術における身体表現およびパフォーマンス性への関心を一貫として核に持ちつつ、映像メディアのさまざまな可能性を探求している。

■ 展覧会図録

『しなやかな闘い ポーランド女性作家と映像 1970年代から現在へ』

テキスト アンダ・ロッテンベルク（美術史家、批評家）、マリカ・クジミチ（美術史家、アルトン財団代表）、アグニエシュカ・レイザヘル（Lokal_30 ディレクター）、岡村恵子（当館学芸員）

日英バイリンガル／約 200 頁（予定）

編集・発行 東京都写真美術館

■ 関連事業

出品アーティストによるリレートーク

日時：8月15日(木) 18:00-19:30
登壇者：ヨアンナ・ライコフスカ、カロール・ラ
ヂシェフスキ、ヤナ・ショスタク (出品作家)
会場：1階スタジオ (定員 50名)、聴講無料
※17:45 開場 ※日英同時通訳付
※当日 10:00 より 1階総合受付にて整理券を配布



Photo: Marek Szczepański



Photo: Kuba Dabrowsk



Photo: Nowak

講演会

「ポーランド美術とフェミニズム (仮)」
日時：8月18日(日) 13:30-16:30
登壇者：アンナ・クテラ (出品作家)、マリカ・
クヂミチ (美術家、アルトン財団代表)、アグニエシ
ユカ・レイザヘル (lokal_30 ディレクター)



Photo: Alexander Kot-Zaitso

「クリティカル・アート潮流の中で (仮)」
日時：8月31日(土) 13:30-16:30
登壇者：加須屋明子 (キュレーター、美術史家、
京都市立芸術大学教授) ほか

会場：1階ホール(定員 190名)、聴講無料
※13:15 開場 ※日英同時通訳付
※当日 10:00 より 1階受付にて整理券を配布



担当学芸員によるギャラリートーク／手話通訳つきギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日 14:00 より 展覧会担当学芸員による展示解説を行います。
8月30日は 18:00 より開催。9月6日、9月20日は手話通訳つき。
※展覧会チケット (当日有効) をご持参のうえ、地下1階展示室入口にお集まりください。

事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

■ 展覧会概要

展覧会名[和]	しなやかな闘い ポーランド女性作家と映像 1970年代から現在へ
展覧会名[英]	Her Own Way—Female Artists and the Moving Image in Art in Poland: From 1970s to the Present
会場	東京都写真美術館 地下1階展示室
主催	東京都 東京都写真美術館、日本経済新聞社
特別協力	アダム・ミツケヴィッチ・インスティテュート/ Culture.pl
後援	ポーランド広報文化センター
協賛	凸版印刷株式会社



開館時間	10:00-18:00 (木・金は 20:00 まで) ※入館は閉館 30 分前まで ただし、8月15日-8月30日の木・金はサマーナイトミュージアム期間につき 21:00 まで開館
休館日	毎週月曜日 (ただし、月曜日が祝日、振替休日の場合、翌火曜日休館)
観覧料	一般 500(400)円/学生 400(320)円/中高生・65歳以上 250(200)円 ※ () は 20 名以上の団体料金、小学生以下、都内在住・在学の中中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料、第3水曜日は 65 歳以上無料 ※ 8月15日(木) - 8月30日(金) の木・金 17:00-21:00 はサマーナイトミュージアム割引 (学生・中高生無料、一般・65歳以上は団体料金) ※ 9月16日(月・祝) 敬老の日は 65 歳以上無料、10月1日(火) は都民の日につき入場無料 ※ 各種割引の併用はできません

■ 広報用図版について

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版のトリミング、文字掛け等の加工はできません。

* キャプションに ※ 印が記載されている図版は掲載条件がございます。広報担当者へご相談ください。

■ 本展のお問合せ

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 〒153-0062

電話 03-3280-0034 / ファクス 03-3280-0033 / ホームページ www.topmuseum.jp

企画担当 岡村 恵子 k.okamura@topmuseum.jp / 遠藤みゆき m.endo@topmuseum.jp

広報担当 久代 明子 平澤 綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp